

IV-50

散歩経路の特性とその魅力について

○秋田大学 学生員 十王館真季
秋田大学 フェロー 清水浩志郎
秋田大学 正 員 木村 一裕

1. はじめに

近年、道路環境や都市空間における快適でうるおいのある空間の整備が着実に進められている。その中でジョギングや散歩といった健康などのために利用される生活道路においても快適性、多様性が求められてきている。本研究では、散歩行動から選好された経路に着目し、散歩に求められる要素や利用経路の特性を把握し、魅力ある散歩経路について考察することを目的としている。

2. 調査概要

調査は平成11年11月、秋田市の公園ならびに住宅地等において、散歩が多いと思われる早朝と午後の時間帯に散歩をしている方々100名にアンケート調査を行った。調査票はその場で回答してもらい回収するようにした。

回答者の属性等を図-1に示している。散歩をしている人の年齢層は多くが高齢者で、早朝の散歩が目立った。目的は健康維持が最も多く早朝の散歩が多くみられた。また犬の散歩は早朝と夕方の2回という例が多くみられた。

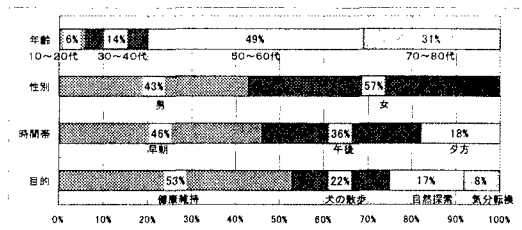


図-1 回答者の属性等

3. 散歩の経路とその特性

(1) 散歩のタイプと実態

散歩のタイプをその主な目的ごとに健康維持、犬の散歩、自然探索、気分転換の4つに分け、それぞれの特性を把握するために経路の性質や心理的イメージなどについて分析を行った。

散歩実態としていくつかの項目に関するデータを表-1に示した。タイプ別の平均年齢(①)をみると健康維持や自然探索で年齢が高くなっており、気分転換の年齢が最も低くなっている。ここでは小さい子供連れの主婦が多くみられた。平均距離(②)では健康維持は距離の長い人と短い人の差が大き

く、犬の散歩や気分転換は、自宅周辺や近所の公園までという人が多く短かった。平均区間数(⑧)は経路範囲に関係しているようで、大通りに沿って歩くタイプの健康維持の区間数が多かった。歩行速度(④)は健康維持目的が速く、自然探索は所要時間も長く時間をかけたゆっくりした散歩であることがわかった。休憩率(⑥)をみると気分転換が最も高く、ついで犬の散歩、自然探索の順となった。平均休憩回数(⑦)は約1回であり、この他には散策路中にあるベンチなどで何度も休憩するという人や、知人に会って話をするときだけ休憩という人もみられた。

表-1 タイプ別の散歩実態

目的	① 平均年齢	② 平均距離(km)	③ 平均時間(分)	④ 歩行速度(km/h)	⑤ 平均休憩時間	⑥ 休憩率	⑦ 平均休憩回数	⑧ 平均区間数	⑨ 区間評価(5点満点)
健康維持	64	3.75	48.75	4.59	9.71	0.29	1	4.19	3.69
犬の散歩	55	2.13	36.04	3.55	10.63	0.55	1.2	3.27	3.77
自然探索	66	3.93	59.38	3.97	16.6	0.41	1	3.35	3.88
気分転換	41	2.75	45.00	3.67	22.08	0.63	1	3.13	3.89

(2) 経路性質

タイプごとの散歩に求める要素を把握するため、経路性質として「安全である」、「散歩仲間同士のあいさつなど人とのふれあいがある」、「緑が多い」の3つを取り上げ図-2に示した。

健康維持目的の人では安全な経路を、自然探索では緑の多い経路を重視していることがわかる。また自然探索は人とのふれあいが少ないことから、緑の豊富な経路を静かに散歩するケースが多いと思われる。

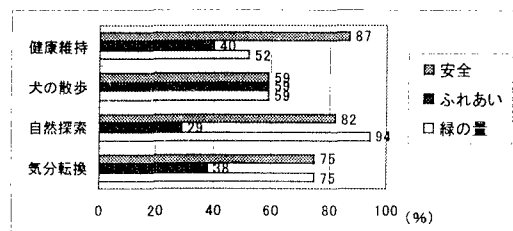


図-2 経路の性質

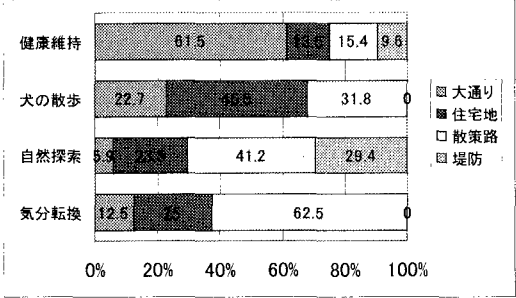
(3) 経路の心理的イメージ

図-3、図-4はそれぞれタイプ別利用経路と心理的イメージを示したものである。

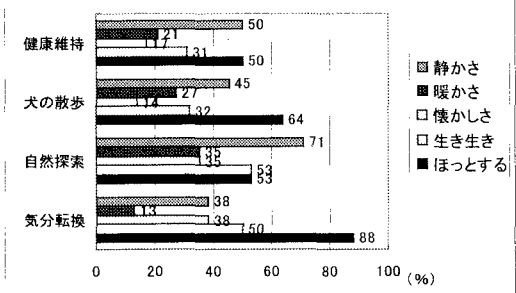
図-3より各タイプでの利用経路をみると健康維

持では大通りが多く、犬の散歩では住宅地、自然探索や気分転換では散策路や堤防といった静穏な経路が選択されていることがわかる。図－４の散歩経路から受ける心理的イメージでは、散歩の時間帯による違いも多少あり、例えば健康維持に利用の多い大通りについては早朝の散歩であれば「静けさ」、午後の散歩では「生き生き」と全く反対のイメージを与えていた。また自然探索は「生き生き」が「静けさ」の次に高くなっている。大通りはあまり好まれていないため、このイメージは自然から与えられるものだと思われる。「暖かさ」や「懐かしさ」はどのタイプも低くなっている。経路に安全性を求めると整備された道路や散策路を歩くこととなり、このような経路からは「暖かさ」、「懐かしさ」といったものはイメージされにくいようである。「懐かしさ」をイメージさせる経路をみると住宅地や線路沿い、神社、寺などがある経路が多く、このような区間では安全面に関する評価が低くなっている。全体的にみると「静けさ」と「ほっとする」が多く、これらは経路の性質の「安全」や「自然」から連想されるイメージと思われる。

以上のことから、散歩にとって好ましい経路とは安全に歩ける歩行空間と緑の多い空間がバランス良く組み合わせられているものといえる。



図－３ タイプ別の利用経路



図－４ 心理的イメージ

(４) 地区別の経路評価

評価対象地区はアンケート調査を行った地区で、

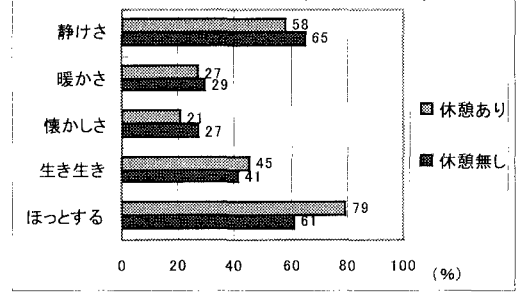
評価方法はタイプ別と同じ視点から経路を分析することとした。その結果を表－２に示している。

各地区特性としては泉、山王、新屋地区には散策路があり、御所野地区は環境の整備された新興住宅地である。栖山地区には河川堤防があり、手形、外旭川、土崎地区は住宅地といった地区である。表－２の区間評価(⑧)をみると環境の整った地区の評価が高く、住宅地が低い傾向にある。休憩率(⑤)も同様で住宅地は休憩する場所がなく休憩したくともできないという意見がみられた。

表－２ 地区別の散歩実態

地区	① 平均 時間 (分)	② 平均 距離 (km)	③ 歩行 速度 (km/h)	④ 平均 休憩 時間	⑤ 休憩 率	⑥ 平均 休憩 回数	⑦ 平均 区間 数	⑧ 区間評 価(5点 満点)
泉	39.53	2.59	3.93	9.50	0.53	1	3.18	4.06
山王	58.46	3.90	4.00	7.92	0.50	1.14	4	3.21
御所野	48.33	3.54	4.39	12.6	0.60	1	3.56	4.11
新屋	50.9	3.13	3.69	45.8	0.47	1	2.58	4.05
手形	46.88	3.09	3.95	12.2	0.26	1.2	4.74	3.36
栖山	50.91	4.77	5.62	7.50	0.36	1	4.36	3.43
外旭川	51.67	3.58	4.16	60.0	0.14	1	3	3.74
土崎	43.33	2.31	3.20	0	0	0	3.86	3.93

休憩率(⑤)については地区によってかなり異なっていることから、休憩の有無別の散歩経路のイメージ分析を行った。図－６に示すように全体としてはほぼ同じイメージであるが、休憩ありの人で「ほっとする」という割合のみ非常に高くなっていることが分かる。散歩は健康維持や犬の散歩など様々な目的があり、それによって休憩ニーズも異なると思われるが、以上のことから散歩コースに適当な休憩箇所を設置することにより、より快適な散歩環境ができるものと考えられる。



図－６ 休憩有無別のイメージ

４. おわりに

本研究では、散歩行動に関する分析から散歩に求められる機能や、経路の性質などの分析を行った。目的によってそのニーズは異なるが、本研究では快適な経路と休憩場所をうまく組み合わせるような散歩ネットワークの必要性を示唆することができたと考えている。